

『戒規か対話か』

2016年02月12日

「北村慈郎牧師の処分撤回を求め、ひらかれた合同教会をつくる会（以下一つくる会）」が『戒規か対話か 聖餐をめぐる日本基督教団への問いかけ』を上梓した。全国の教会の牧師、信徒41名から寄せられた学術的な論文や率直な意見を述べた文章などを編集し、出版している。本の題名からも分かるように、教団執行部、そして全国の諸教会に「対話」を呼びかけている。私は、主イエスの福音は何か、その福音は時代とどう関わるのかを問うた重い本として読んだ。

北村牧師は、赴任した紅葉坂教会で、教会全体で聖餐に関する研修を深め、未受洗者でも望めば、聖餐に与ること（オープン聖餐）ができると総会で決議し、教会規則を変え、執行した。教団はその執行は教憲、教規に違反するとして、北村牧師を免職処分とした。免職は人権、生存権を奪う最も重い戒規処分である。聖餐は受洗した者が与れる（クローズド聖餐）という理解が伝統的であったと言えよう。しかし、聖書学、教義学、宣教論、牧会学的にもオープン聖餐が福音的ではないかという議論が起こっている。私は牧会経験から、オープン聖餐が主イエスの思いに添うと思っている。

北村牧師の免職処分は十分な審議、手続き、対話を行うことなく、強引に出された。教憲、教規違反と断罪したが、法的に違反と解釈できないという理解もある。何より、聖餐に関して、世界の教会は一致した合意に至っていない。クローズド聖餐が一般的であろうが、カナダ、米国、ドイツの教会などではオープン聖餐を取り入れた教会もある。真理問題として決着を見ていない状況にある。教団の諸教会において、オープン聖餐を執行している教会は、パーセンテージは分からないが、かなりあることは事実である。それなのに、北村牧師一人だけを「スケープゴート」にして、免職したことは異常という他ない。

教団執行部は教義や規則を小さな枠内で真理と捉え、その枠を超えた者を切り捨て、対話もしない権力的、独善的な教会政治を行っているとしか思えない。教会は主イエスの福音の内実を問い、それを生きる群れであって、権力を志向し、数で事柄を決する群れではない。対話の拒否は自らの不誠実さを露呈していることではないか。北村牧師を支援する「つくる会」は賛同者を日増しに加えている。当然である。

「つくる会」は下記の5項目を求めている。① 北村慈郎牧師の免職処分の即時撤回と教団教師としての復権を求めます。② 聖餐についての議論の場が設定されることを求めます。③ 「戦責告白」の教団史における意義を踏まえ、歴史に向かい合う教団となることを求めます。④ 沖縄教区に対する謝罪と関係回復への具体的な作業を求めます。⑤ 一方的な「合同教会」の主張を再考して「合同教会」の形成を求めます。

北村牧師は人権、生存権を否定されたにもかかわらず、淡々と対処している。この免職問題は主イエスの福音が何であるかを提起している。主イエスの恵みは固定的な教義や硬直した戒規を超えて、赦された者として共に生きよと、あらゆる立場の人々に開かれている。そして、抽象化した理念や観念ではなく、悩ましい社会と直接関わり、命の尊厳を守り、平和の実現を目指すものである。殊に、弱い立場に置かれている人々の復権こそが主題テーマである。オープン聖餐を先んじて執行しているのは、生きることに苦悩を強いられた地域であったことが、聖餐が開かれたものであることを如実に物語っている。現在の教団はあまりに政治主義的である。福音の内実を問う真に神学的、福音的な対話を生み出す群れになることが望まれる。『戒規か対話か』を読み、希望はあると勇気づけられた。